〔日本記者クラブ会見　2022.7.15〕
Conference at the Japan Press Club, July 15, 2022

# 「2022参院選：世論調査が語る民意」

Responses to a Public Opinion Research in the 2022 House of Councillors Election

松本正生
埼玉大学名誉教授

○川戸　時間になりましたので、これから始めます。司会は私、日本記者クラブ企画委員、TBSテレビの川戸でございます。よろしくお願いいたします。

いろいろありました参議院選挙ですけれども、今日は「2022参院選：世論調査が語る民意」というタイトルで、埼玉大学名誉教授の松本正生さんにお越しいただきました。

選挙後の恒例となっておりますけれども、世論調査、選挙分析の第一人者である松本さんに、今回の参議院選挙の結果について分析していただきたいと思います。

松本先生は日本記者クラブでご登壇いただくのは今回が12回目になります。去年は7月の都議選後、それから11月の衆院選後、合わせて2回登壇していただきました。

まず、この後、松本さんに60分間ほどお話しいただきまして、続いて質疑応答に移ります。質問は会場とオンラインの双方からお受けいたします。

それでは、松本先生、よろしくお願いいたします。

○松本　こんにちは。松本でございます。よろしくお願いします。

今回も、選挙後のお話ということでお声をかけていただきましたこと、大変うれしく思います。どうもありがとうございます。いつも通り、世論調査のデータに基づいてお話して行きたいと思います。

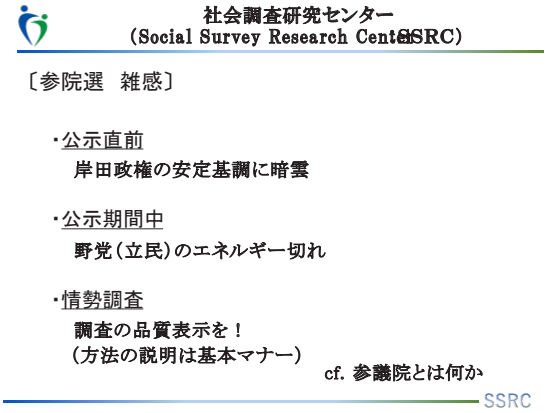
お手元にパワーポイントのスライドが配付されていると思います。ちょっと量が多くて全部で24枚。あと1つ、追加で別立てのデータ。これはパワポのスライドをお送りした後に、川戸さんから新たなご下問がありまして、慌ててそれに関連したデータを付け加えてあります。よろしくお付き合いください。

## 1. 参議院選挙の意義

最初に、今日のお話のストーリーというか、まとめをしておきたいと思います。

1番目は公示直前ぐらいまでの状況としては、3、4、5月と岸田政権の内閣支持率は非常に安定していて、いわゆる旧来の自民党内閣の支持構造といいましょうか、いわゆる「若低ー老高」という、ご年配の方で支持率が高いという形に回帰しておりましたので、非常に安定していたのですが、6月の半ばぐらいから、スライドには「暗雲」と書きましたけれども、支持率に陰りが見られて、コロナだけではなくて物価の問題が重なって少し逆風が吹き始めたという形で選挙戦に入りました。選挙戦の序盤、中盤ぐらいまでは、それがもう少し強くなって、かなり逆風が強くなるのかなと思っていたら、投開票日の1週間前ぐらいでしょうか、中盤というのでしょうか終盤というのでしょうか、その辺のタイミングで逆風が止まった感じになりました。というよりも、対する野

党、特に立民のほうが息切れしてしまったという感じになりまして、結局のところ、大体そのままの感じで投開票日に入ったなという見立てをしてります。




あの銃撃事件からちょうど今日で1週間です。「安倍元首相のアクシデントの影響は」と当然聞かれるわけですが、それほど影響というのはなかった、投票率が若干上がり、自民党に対しての票が（後でデータもお見せしますけれども)、少し上乗せされたというところはあるのでしょうけれども、ほとんどなかったという見立てをしております。

もう1つ、私の専門である調査の話としては、昨年の10月末の衆院選が終わった後にもここでお話ししたのですけれども、衆院選時と同様にメディア各社の方法が今回も分かれました。多様な方法で調査が行われるという状況が見られたのですが、一番申し上げたいことは、その比較をしようにも、どういう方法でどのようにやられたのかという情報が開示されておりませんので、ちょっと確かめようがない。開示された情報や紙面等々で当然確認をしておるのですけれども、残念ながらその辺を確認する術がないということで、そこが一番、私としては問題ではないかなと思います。「調査の品質表示を！」と書いたのは、そういうことです。

あえて余計なことを付け加えると、これからご覧に入れるいわゆるドコモさんのプレミアパネルの方たちへの「ｄサーベイ」を、私どもはオリジナルの調査方法として商標登録しておりますけれども、今回はこの調査方法一本で全部完結させました。それ以外の方法で情勢調査を行っておりません。前回衆院選のときは、私どものもう1つオリジナルで商標登録している方法、いわゆる「ノン・スポークン」と私どもが呼んで商標登録しているこの方法でも情勢調査を行いました。今回、私どもはこの調査方法では調査を実施しておりませんが、（固有名詞を挙げるのはフェアではないからちょっと丸めますが）K社さんに関して言うと、この私どものオリジナルの調査方法で序盤の調査を行われているようです。いわゆるオートコールで携帯に関してはショートメッセージを経由して回答してもらうという、まさに私どもの「ノン・スポークン」調査です。ただ、これはどんな配分なのかというのが開示されていないので確かめようがないのですが、私どものオリジナルの調査手法でおやりになったということで、ああ、こういうこともあるんだなと思っています。終盤に関しては電話世論調査でということだけしか分かりませんので、この辺は固定と携帯がどうなのか、それからオペレーターさんを使った従来の方法なのか、オートコールなのかも分からないので確かめようがありません。

さらに余計にことを付け加えると、例えばずっと以前から合同という形で調査をおやりになっているY社さんとN社さんの調査方法に関しても、『固定電話と携帯電話番号を対象にして調査員による調査と自動音声による調査を組み合わせた』と紙面では書かれておりますけれども、その辺もどういう手法で調合されたのかということが分かりませんので、何とも比較やコメントのしようがないなと思います。実は、このY社さん、N社さんの調査に関しては、私が対象者として選ばれてお答えしました。私のところには、スマホにオートコールで来てショートメッセージ経由でインターネットに切り替わって、そのネットの画面を見ながらタップする。我々のやっているのと同じだなと思ってお答えしたのですけれども、ただ、この紙面で書かれている方法とは直結しないので、何だったのかなというふうに思っています。ちょっと確かめようがないのですけれども。

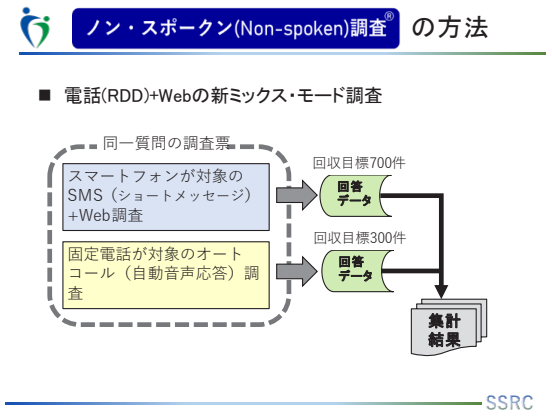
何が言いたいかというと、私どものｄサーベイも含めてたくさんの架電ないし配信をして、皆様にお答えいただいているわけですよね。私どものｄサーベイに関しても、ランダムで選んでいるわけですが、私の家族も対象になりましたし、友人も対象になって、「プレミアパネルのｄサーベイ

が来たよ。答えたよ」と私のところに連絡があって「どうでした？」というお話をしました。特に今回は、中盤でしょうか、7月の頭のところで、例の輻輳事件が起こって、大変なトラブルの中で各社ともあの時期におやりになって、その混乱の中で有権者の皆さんが対応してくれているわけですから、やはり「あの調査って、どこどこの調査が来たけれども本当かな」とか、「どういう方法だったのだろうかな」ということを確認されたいと思うのですね。しかしながら、そこが開示されていないので、「ああ、やはりこれだったんだ」とか、「私のところに来たのはここの調査だったのね」ということが確認できないわけで、その辺をきちんと開示しておくことが基本マナーではないだろうかと思って、こう書きました。

この話はここまでにしますが、もう1つだけ前置きをしておくと、これから調査結果に基づく世論ということで、現象的な事柄に関しての解釈をしていくわけですけれども、私の話というのがどういうキャンパスの上に乗っているかということは、常に引っかかりながら話をしていかなければならないわけです。「参議院とは何か」と書きましたけれども、日本の二院制ということで言うと、これは言うまでもないことですけれども、議院内閣制にもかかわらず直接公選の二院制というのが組み合わさっているわけですよね。なおかつ第二院のほうに立法権が留保されて、それだけではなくて大統領拒否権を第二院が持っているという非常に特異な二院制になっているわけです。直接公選の二院制ということであれば、当然その上院というのは何の院なのかという代表の理念というものが明確になっていないとならない。もっと言うと、下院と上院は何の代表なのだというところの組み合わせが制度設計されていないと二院制をつくりようがないし、それがあって初めて選挙制度というものは理念を基準にして検討されるということなのだと思います。ところが、それがない中で選出方法だけつくられるということになると、当然選挙制度というのは、選ばれる側の都合で決まっていく、変わっていく。こういうことにならざるを得ないので、要するにそういう前提の上で行われている選挙というもの、それにどう世論が対応したということをこれから解釈していくわけです。私が、スライドのトップに、あえて「雑感」と書いたのはそういう意味合いで、自分の使っているデータや話というものに関して、冷めているところを持たないといけないと、自分自身に言い聞かせながらながらお話をするということです。

## 2.「ノン・スポークン」調査の結果

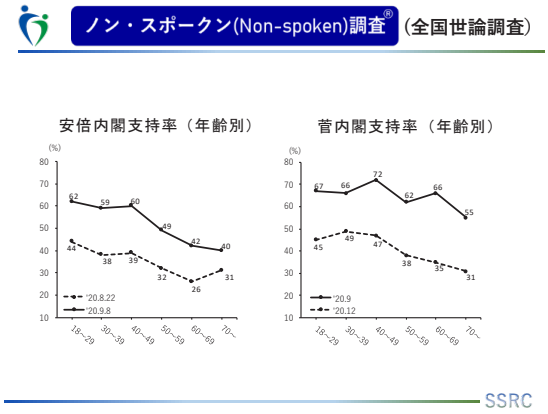
前置きが長くなったので、先に進みます。この図をお見せするのは、今回で3回目だと思います。




昨年の東京都議選、それから衆院選の後も、こういう方法で実施しましたということで、我々の「ノン・スポークン」調査のお話をしました。今回は公示直前までの状況ということで、「ノン・スポークン」に関しては定例調査の手法です。固定電話を対象にした、いわゆるＩＶＲ と言っている自動音声、それから同じＲＤＤでも携帯電話（イコール、スマートフォンですけれども）に対してはショートメッセージを経由して、そこからWebに転換し、Web調査として画面を見ながらタップしていただく、あるいはクリックしていただく。こういう組合せでミックスさせて実施しています。

この調査結果に基づいて、直前ぐらいまでどういう状況だったか、どういう状況で選挙に突入したかということをお話すると、まずはやはり安倍内閣から行きたいと思います。

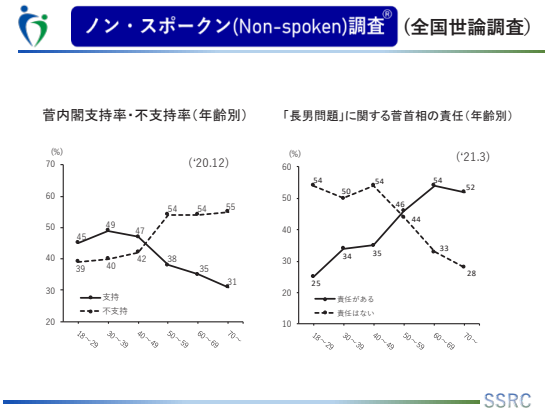
左の図は安倍内閣の最後のほうで20年8月、コロナ禍の影響で支持率が非常に低くなったときの形状です。支持率が低下しても、若い人で高くて年齢が上がると下がっていくという、従来の自民党政権とは逆の「若高－老低」型が維持されている。これが最後の20年9月のデータで、（お辞めになると言われてから）ぐっと上がるのですけれども、同じ形状で上がる。これが安倍内閣の特徴で




した。

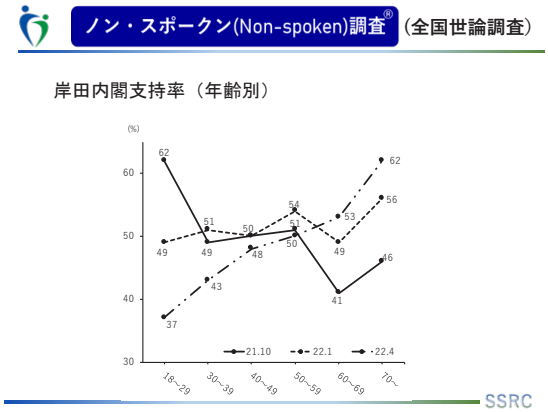
右の図の菅内閣も全く同じで、発足当初は安倍内閣の支持率よりもずっと高くて、なおかつ若い人で高いという傾向を維持して発足し、その年の暮れぐらいからコロナの感染爆発ということがありましたので支持率が下がる。支持率が下がった状況でも同じ形状で下がるので、若年層が支えている右肩下がりのこういう構造が継続していったわけです。

菅内閣は、こういう形状のまま推移していくのですけれども、支持と不支持の構造という形で見てみると、これが20年12月、先ほどお見せしたものと同じ形状です。




不支持はどうかというと、こうなっています。40代ぐらいまでは支持のほうが高くて、ぐっと右肩下がりで支持率が下がっていく。逆に言うと、ご年配の方たちのところが不支持が高い。年齢の高い人たちが批判派のコアであるという安倍・菅政権の特性があって、前にお見せしたかもしれませんけれども、これと同じ形状のデータは何かないかというと、右の図が全く同じです。例の菅さんの長男問題に関して責任をどう思うか聞いたときに、「責任がある」とお答えになるのは、年配の方が非常に批判的でこういう問題に敏感である。お若い人はどうかというと、「責任はない」が圧倒的に高いという構成が特徴で、支持率と重なり合うという特徴があったわけです。これは菅さんの長男問題に関する結果ですけれども、これと全く同じ形状になったのは、安倍さんの頃の桜を見る会です。「桜を見る会の問題に関する安倍首相の責任をどう思いますか」とお聞きすると、やはりこれと同じ形状が見られました。こういう問題に対して、年配の方は非常に敏感だということだったのだろうと思います。

さあ、それで岸田内閣ですけれども、設立当初はこの「若高－老低」形状を引き継ぎます。これが21年10月ですから、岸田内閣の設立当初で、安倍・菅政権の形状を引き継いで発足しました。

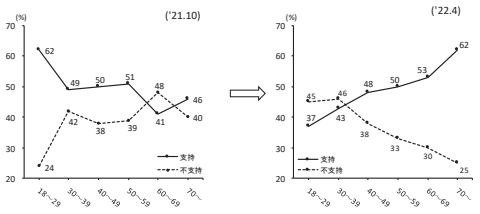



ところが、衆院選が終わってしばらくすると形状がこう変わります。これが22年1月で、非常にフラットな形状に変わって、この半年の間にきれいに反転します。22年3月ぐらいからこういう形状になったのですけれども、半年の間に、過渡期を挟んでこういう形にきれいに反転していきます。若い人で低くて、年齢が上がると高くなっていくという、いわゆる旧来の自民党政権の特徴である「若低－老高」型支持構造、あえて言えば55年体制モデルと言っていいかもしれませんけれども、この半年の間に反転するということが起きて、3月、4月、5月ぐらいはこういう形状が見られました。だからこそ安定していたわけです。

したがって、先ほどの支持と不支持のクロスと対照させると、設立当初の21年10月のグラフはこういう形状で引き継いだわけですね（左図）。

ノン・スポークン(Non-spoken)調査® (全国世論調査)

岸田内閣支持率・不支持率（年齢別）




SSRC

どちらかというと若い人の支持は高くてということになるので、年配層がまだ批判派。それが半年の間にどうなったかというと、きれいに反転して、若い人ほうがむしろ不支持が高くて、年齢が上がるにつれてぐっと支持率が上がる、逆に言うと不支持率は下がる（右図）。

半年できれいにここまで反転するという、ある意味でドラスチックな変化が見られました。「若低ー老高」型は、60歳以上の方たちのボリュームが多いわけですから、当然支持率としては安定基調になる。ここまで大きく不支持が下がるということで、年配の方の中でこの半年の間に何があったのだろうかということが、実は非常にポイントだろうなと思います。

統計データになぜを求めるのはご法度ですので、そこのところはなかなか見て取れないのですけれども、新聞紙上では「世の中的には岸田さんのハト派的なスタンスというものが、いわば安心感を持たれたのではないの？」というコメントを見ました。先ほどの菅さんのときの問題のところでお見せしたように、岸田さんの場合は、1つはご本人まつわるスキャンダルがないというところは多分大きいのだろうなと。当然ご年配の方はこういうことに非常に敏感なので、言ってみればクリーン岸田、昔「クリーン三木」という言葉がありましたけれども、クリーン・イメージが1つあるのだろうなというふうに推測しています。

「若低ー老高」形状が3月、4月、5月と見られたので、これはもう安定基調に入ったなと思っていたのですが、6月に入ってからちょっと変わります。5月までの内閣支持の上がり下がりというのは、コロナに対する評価と完全に連動していました。評価が下がると支持率が下がる、上がると上がるという感じでした。

ノン・スポークン(Non-spoken)調査® (全国世論調査)

岸田内閣支持・不支持とコロナ対策評価

| | | '22.1 | '22.2 | '22.3 | '22.4 | '22.5 | '22.6 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 岸田内閣 | 支持する | 52 | 45 | 48 | 50 | 53 | 48 |
| | 支持しない | 36 | 46 | 38 | 34 | 37 | 44 |
| コロナ対策 | 評価する | 31 | 27 | 30 | 35 | 41 | 41 |
| | 評価しない | 39 | 51 | 38 | 34 | 31 | 31 |

(%)

SSRC

ところが、たしか6月18日の調査だったと思うのですけれども、コロナの評価というのは変わらないにもかかわらず、内閣支持率だけが下がります。連動関係が見られなくなって、ならば支持が下がったのはなぜかなということで要因らしきものを探ってみると、ああ、こっちかということが一応分かったわけです。それは何かというと、物価対策に関してです。

ノン・スポークン(Non-spoken)調査® (全国世論調査)

岸田政権の対策・政策評価（年齢別）

(22.6)

| | | 18～29 | 30～39 | 40～49 | 50～59 | 60～69 | 70～ | 全体 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 物価対策 | 評価する | 20 | 5 | 11 | 13 | 15 | 24 | 14 |
| | 評価しない | 56 | 76 | 68 | 63 | 60 | 46 | 62 |
| 資産倍増プラン | 評価する | 25 | 22 | 23 | 22 | 26 | 20 | 23 |
| | 評価しない | 51 | 59 | 50 | 63 | 54 | 51 | 55 |

(%)

SSRC

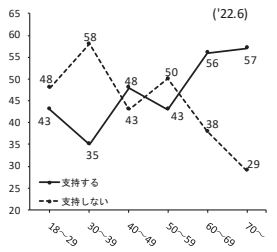
この「評価しない」が、30代から50代くらいの実年世代で圧倒的に高い。年配の方はそうでもないのですけれども、例の資産倍増プランもあまり評価は芳しくないということで、「コロナの次は物価かよ」という形で、離反や反発というのがか

なり増えてきたなと思っていました。

内閣支持率で見てみると、6月のグラフがこうなりましたから、ご年配の方は高いというところは安定要因なのですけれども、真ん中のところがこういう感じで拮抗して、そんな状況のまま選挙に突入したということで、さあどうかなという感じで見ていました。

ノン・スポークン(Non-spoken)調査® (全国世論調査)

岸田内閣支持率・不支持率（年齢別）




SSRC

ただ、岸田内閣の支持率に関しては6月半ばぐらいに陰りが見られたのですが、これがすぐ政党支持に直結したかというと、そうでもない感じがしていて、ちょっとその辺が読みづらい中で参院選挙が公示されることになりました。もともと岸田内閣の支持率は、安定するまでは特異な動き方をしていて、例えば衆院選直後で見ると、内閣支持率は上がっているのに自民党支持率が下がって、内閣支持率と連動しているのは維新のほうで、内閣支持率が下がると自民の支持率が上がって逆に維新が下がるみたいな、こういう非常に理解しがたいような傾向があったのですけれども、12月から2月というのは、まさに「若高－老低」からフラットになり、さらには「若低－老高」へと変化する過渡期の現象だったのだろうなと思うのです。

4月ぐらいからは完全に内閣支持と自民党支持が連動する感じになってきて安定基調に入ったのだなというところが読み取れるのですが、内閣支持に比べて自民党支持はそれほど下がっていない。もう1つ、立民に関しては、衆院選挙後に一桁まで落ち込んだのが回復せずに選挙戦に入る。維新も、22年12月が最高値で、そこから下がってきたのが、それほど大きな変わり目はないところで選挙戦が始まった。

ノン・スポークン(Non-spoken)調査® (全国世論調査)

内閣支持率と主要政党支持率の推移

| | 22.11 | 22.12 | 22.2 | 22.4 | 22.5 | 22.6 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 内閣 | 48 | 54 | 45 | 50 | 53 | 48 |
| 自民 | 32 | 27 | 35 | 35 | 37 | 34 |
| 立民 | 12 | 11 | 8 | 7 | 8 | 7 |
| 維新 | 16 | 22 | 16 | 10 | 11 | 13 |

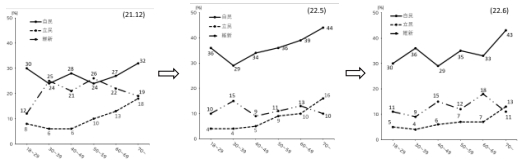
（%）

SSRC

こういうグラフをつくると一目瞭然で、維新が最高値の22%あったときの実線が自民、二点鎖線が維新、鎖線が立民の支持率の年齢別です。

ノン・スポークン(Non-spoken)調査® (全国世論調査)

政党支持率（年齢別）




SSRC

維新の場合、30代～50代ぐらいまでが自民党支持率と拮抗しているという状況があり、これが4月、5月ぐらいになると自民党がこういう形で、岸田内閣の支持率と似たような感じで年配の方の支持率が高い形に変わってくるのです（中図）。結局、自民党がいわゆるキャッチオールで一強という感じが4月、5月ぐらいに見られて、6月に支持率が落ちたときにどうかというと、あまり変わりがないという感じで、内閣支持ほどは政党支持の動きがない中で選挙に突入したというプロセスです。

## ３．「ｄサーベイ」の結果

それで選挙戦の本番に入ります。選挙の調査は「ｄサーベイ」が一番頼りになるので、こちらの「ｄサーベイ」の結果でお話しようと思います。

## dサーベイ の方法

＜調査方法＞

NTTドコモのスマホユーザーを中心とする
「プレミアパネル」(dポイントクラブ、全国約800万人)の
会員から対象者を無作為に抽出。
「メッセージR」(メール)で調査への協力を依頼しWebアン
ケートに答えてもらうスマートフォン調査。個人所有のス
マートフォンを対象とする。

⇓

耳で聞く調査から「目で見る調査」へ

SSRC

これも何度もお話していますけれども、きちんと調査方法を説明しなければいけないので、「dサーベイ」は私ども社会調査研究センターとNTTドコモさんで共同開発した調査方法で、ドコモさんのプレミアパネル、全国で今5，800万人ぐらい――有権者のほぼ半分ですけれども――の方を対象にして、いわゆるメッセージR で協力を依頼してWebで答えてもらう。個人所有のスマートフォンだけを対象にした、いわゆるインターネット調査です。電話調査ではありません。電話番号が関係するものではなくてインターネット調査です。

電話調査との違いは、耳で聞く調査から「目で見る調査」へという形に質的に変わっています。

これを図示すると、こんな感じでメッセージRが皆さんのところへ届いて、画面を見ながらお答えをお願いする。これで回答していただくと集計に至るという調査方法です。

## dサーベイ の方法

「dサーベイ」はスマホ限定調査

「d−サーベイ」の実査プロセス

SSRC

品質表示をしなければいけないわけですけれども、去年の衆院選もかなりの精度で情勢をつかめて一定の評価を受けたのですが、衆院選の段階は、回答者の属性構成に多少の偏りがありました。既存のＲＤＤ携帯電話調査と同じ特性があって、女性がなかなか取れないという限界があったし、スマートフォンによるインターネット調査だということで年配の方の回答が少ないという限界がありました。私どもその辺を検討しまして、今回の参院選調査に関しては、従来の限界をかなり克服して、（これからお見せするのは4回の調査結果の加重平均ですけれども）まず男女比はイーブンになりました。もう1つ大きく変わったのは、ご年配の方の回答がたくさん取れるようになって、70以上の方が20%、60以上の方が42%ですから、ほぼ投票者の構成に近づくような形の回答が得られるようになってバランスが取れるようになったということです。特にこれは全国平均ですから、地域によっては70以上が30%近くを占めるという形に変えることができました。

## dサーベイ：参院選（全国調査）

回答者の属性構成

| | 2021衆院選調査 ⇒ | 2022参院選調査 |
|---|---|---|
| 男性 | 57% | 49% |
| 女性 | 41% | 48% |
| 18～29 | 5% | 5% |
| 30～39 | 13% | 12% |
| 40～49 | 27% | 18% |
| 50～59 | 29% | 23% |
| 60～69 | 19% | 22% |
| 70以上 | 8% | 20% |

2021衆院選調査は3回分の平均値
2022参院選調査は4回分の平均値

SSRC

普通、こういう調査は、特に情勢調査の場合は事後補正、データを年齢や属性構成に合わせる形で補正するということが必要になってきます。私どもも補正をいろいろ試みてみたのですけれども、「ｄサーベイ」のプレミアパネルの特性から言って、事後補正ではなくて事前の設計をきちんとやることが重要なポイントだと。何を言いたいかというと、せっかくのランダム性を壊さないように、ランダム性を維持した回答が得られるような形にするということで、事前の設計が大事だなということが分かってきたので、そういう方式を採用すると首尾よくいったということです。

ちょっと表のサイズが小さすぎるのですけれど

も、こんな感じですよという話です。これが実は今回のトピックで特性なのですけれども、比例の個人候補者名で調査ができるわけです。

ネットで一覧性があるので候補者をそれぞれの政党ごとに列挙して、「候補者で選ぶ」と回答した人に関して、「候補者を選ぶとすれば誰にしますか」という。今回の比例選は候補者名で回答した人の比率がさらに下がって22%しかいなかったわけですよね。この候補者名で回答した人って、考えてみれば政党と人を両方選べるので、お一人で2票持っているという感じなのですけれども、この22%にすぎない人たちに関して、投票先の候補者の順位づけを各情勢調査で行って「これだけの回答を得ました」ということで、クライアントさんの玄人筋からはすばらしいとすごく評価を受けているのです。自民党に関して言うと、この上に特定枠がいますから、全部で18ですけれども16人。これが当選順位ですけれども、それが各調査でどうだったかというと、この16人はきれいに当選した16番までに大体入っている。下の立民に関しては、7人当選しているので、お一人だけ9番で7人の中に入っていないのですけれども、このような感じで個人名に関しても捕捉できますということで、ちょっと自信を持っているわけです。

品質表示は大概にして結果の解説に移ります。

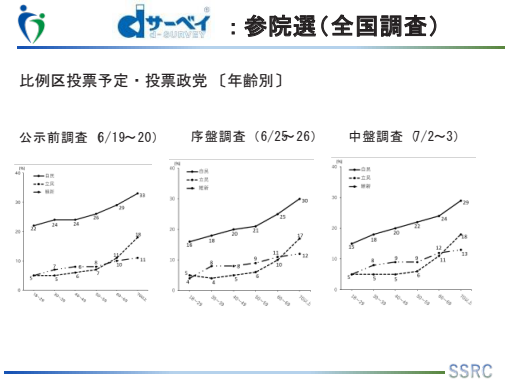
今回、私どもの「ｄサーベイ」に関して言うと、全国規模の調査を実は6回行っています。今日お見せするのは公示前（6.19～20）、序盤（6.25~26）、中盤（7.2～3）、投票日当日（7.10）――これは出口調査に当たるわけですけれども、4回のデータをここに持ってきました。

まず比例のほうです。先ほど言ったように公示

前から序盤にかけて、政党名とか候補者名を答えた人の中の比率で見てみると、自民党の数値が下がって結構逆風が吹いているなという感じがして、特に序盤の25、26日ぐらいのデータを見て、次はどうなるのかな、このまま逆風がさらに強くなるのかなと思っていたら、1週間前（7.2~3）ぐらいにはほぼ止まって、そのままの投票結果になる。それはなぜかというと、野党の側に風が吹かないので、詰め切れなくて止まってしまっている。18日間の選挙戦の途中で残念ながら息切れしちゃっているのかなという感じです。こんな状況が見て取れました。

下の表が選挙区で、候補者の数がそれぞれの選挙区で違うので注意しなければいけないのですけれども、選挙区も同じで、自民党に関して言うと、公示前から序盤にかけて下がって、さらに下げ幅が大きくなるかと思ったら中盤で持ちこたえてそのままと。こちらの立民に関しては、なかなか詰め切れないままで息切れしたなという感じですね。維新は、選挙区なので候補者の数が少ないですけれども、こんな感じだったということです。

年齢別にまとめたのが、この図です。



公示前調査の段階は自民党が相変わらず強くてキャッチオールで、このグラフは立民、これが維新という状況で突入し、ちょっと逆風が吹き始めたときは、自民党が全体としてかなり押し下げて、自民党が下がったということでこの差が詰まった。

それがどこまで詰まるのかなと見ていたら、ここで止まったという感じでしょうか。ほぼ数値も同じですし、野党（立民）が詰め切れない。大体結果もこういう感じで出ていますので、先ほどのような見立てをしたということです。

くどくど言ってもしようがないのですけれども、後で衆院選との比較をするために紹介しておきますが、これが比例区のほうで、支持政党別に、自民党支持者がどの党の候補者に投票するか、立民の支持者がどの党に、ないしはどの党の候補者に投票するか。言ってみれば、自民や立民にとってみれば歩留まりという言葉になるのでしょうか。

：参院選（全国調査）

比例区　投票予定・投票政党（支持政党別）

| 投票＼支持 | 公示前（6/19～20） | | | 序盤（6/25～26） | | | 中盤（7/2～3） | | | 投票行動（7/10） | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 自民（32） | 立民（9） | 支持なし（35） | 自民（32） | 立民（8） | 支持なし（34） | 自民（31） | 立民（8） | 支持なし（34） | 自民（39） | 立民（10） | 支持なし（28） |
| 自民 | 73 | 1 | 7 | 63 | 1 | 6 | 63 | 2 | 6 | 71 | 3 | 23 |
| 立民 | 1 | 75 | 5 | 2 | 73 | 5 | 2 | 73 | 6 | 3 | 75 | 17 |
| 維新 | 5 | 3 | 5 | 6 | 3 | 6 | 7 | 4 | 7 | 9 | 5 | 18 |
| 決めていない | 13 | 13 | 69 | 17 | 12 | 67 | 15 | 9 | 61 | | | |

（%）

SSRC

あとは支持なしの人たちがどうか。表中の自民、立民、支持なしの下に表示した〔　〕に入っている数値は、それぞれの支持率です。自民党支持率、立民支持率ということです。

支持者別にどうだったかということなのですけれども、今回はキャスティングボードを握る支持なし層がなかなか決まらない。どこにも風が吹かない形で割れたまま推移して行ったという状況が1つの特徴かなと思います。

実際の投票行動で見てみると（後で比較しますけれども）、立民の歩留まりが悪いだけではなくて、支持なしの票が割れている。さらに、支持なしの票が割れた上に自民がわずかとはいえ一番多い。去年の衆院選で言うと、割れてはいるけれども立民が一番多くて、支持なしの票を取っているということで、ある程度接戦になったわけです。

もう1つ特徴的なことは、去年、衆院選の1週間前に参議院の静岡補選があって野党系立民系の方がお勝ちになりましたよね（今回落選されましたけれども、たしか静岡選挙区で）。あのときのデータをここでお見せしたと思いますけれども、支持なし票の約7割が立民系の野党の人に入れている。だから、勝ちパターンとしては支持なしの票が集中することが必要だったわけだけれども、割れましたねというお話を去年ここでしたと思いますが、それ以上に今回は立民にとっては厳しいという傾向でした。

これは選挙区です。

：参院選（全国調査）

選挙区　投票予定・投票候補者（支持政党別）

| 投票＼支持 | 公示前（6/19～20） | | | 序盤（6/25～26） | | | 中盤（7/2～3） | | | 投票行動（7/10） | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 自民（32） | 立民（9） | 支持なし（35） | 自民（32） | 立民（8） | 支持なし（34） | 自民（31） | 立民（8） | 支持なし（34） | 自民（39） | 立民（10） | 支持なし（28） |
| 自民 | 48 | 3 | 6 | 51 | 3 | 7 | 54 | 3 | 7 | 77 | 5 | 29 |
| 立民 | 2 | 43 | 4 | 3 | 49 | 6 | 3 | 51 | 8 | 5 | 64 | 23 |
| 維新 | 2 | 1 | 1 | 2 | 1 | 1 | 3 | 2 | 2 | 4 | 2 | 9 |
| 決めていない | 40 | 34 | 74 | 34 | 24 | 69 | 28 | 19 | 62 | | | |

（%）

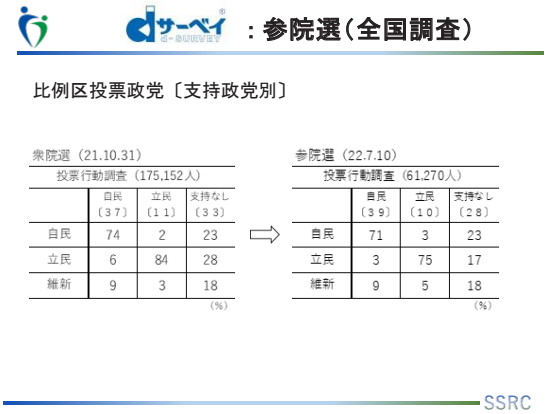
SSRC

選挙区もこういう感じで、自民党は最後はこういう形で一応上がるのですけれども、立民は歩留まりが上がらないままだった。選挙区に関しても、支持なしの票で言うと自民のほうがたくさん取る。こういう形で推移したということでした。

次の比較表を見ていただいたほうが分かりやすいと思うので用意したのですけれども、支持政党別の比例区投票政党です。

右側が参議院の今回の結果、左側が去年の衆院選です。これは投票行動調査結果ですから、投票日当日に「どなたに、どの党に入れましたか」とお聞きした結果を支持政党別にまとめています。衆院選では、自民は74%で立民に比べてほかの党にも流れています、立民に関しては歩留まりの比率が84%と高かった。支持なしに関しては、集中はせずに割れていて、自民も維新もそれ相応に取っているのですが、一応、立民が28%と一番取っ

てはいるという結果でした。これが去年の10月31日の衆院選です。




右側が今回です。衆院選と比較すると、まずは立民がはっきりしていて、自党の支持者も固め切れていない上に、支持なし票が去年以上に落ち込んでいる。よくよくみれば、支持政党なし層については、自民と維新への比率は去年とほぼ同じなわけですよね。ほぼというより、そっくり同じです。ということは、残念ながら、立民の一人負けという様相が見て取れると思います。

さて、安倍元首相の事件があって、これのインパクトがどうだったかということを検証するデータを我々は持ち合わせていないのですけれども、傍証としてはこの結果をお示しできるかなと思って持ってきました。

これは投票日当日の調査結果です。私どもの調査は、調査員が投票所の出口で行うものと違って、対象者の方たちにインターネットで「どの党に投票しましたか」、「誰に投票しましたか」をお聞きするので、当日に投票した方だけではなくて期日前に投票した方の動向も捕捉できるという特性があります。今回の調査では「当日投票されましたか。それとも期日前に投票されましたか」という質問を設定して、自己申告ですけれども、当日投票した人の選挙区や比例の投票政党、期日前で投票した方の投票政党を区分して集計してみました。

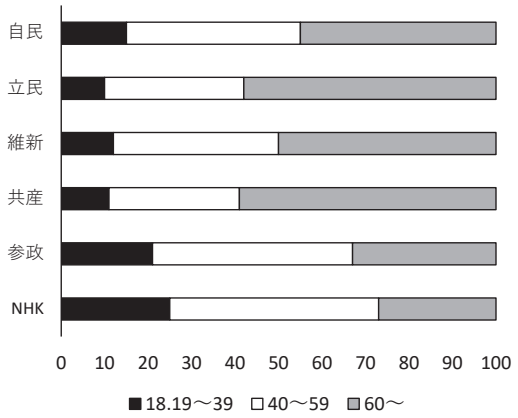
そうすると、自民党の比例区が期日前の方より当日投票した人のほうが若干高いかなという感じはするのですけれども、それほど大きくは違わない。立民はむしろ下がっているなというところがあります。期日前よりも当日のほうで比率が高くなったのは、選挙区・比例とも維新かなと。公明党についても、期日前のほうが当日よりも圧倒的に高いというのも、ちゃんと捕捉できているなと思います。こんな感じで集計結果が出てきたので、先ほど言いましたように、自民に多少プラスになり、全体の投票率を少し押し上げるということはあったのかもしれませんけれども、安倍元首相の銃撃事件のインパクトは、それほどでもなかったということが見て取れるのではないかということの傍証です。ここまでがプロセス的な話です。

次は、昨日パワポのスライドをお送りした後に、川戸さんから今回の参政党とかNHK党はどうだったのかということをちゃんと話せというご下問を頂いたので、夜に追加で作ってお送りしたデータです。

**比例区投票者の年齢構成比**

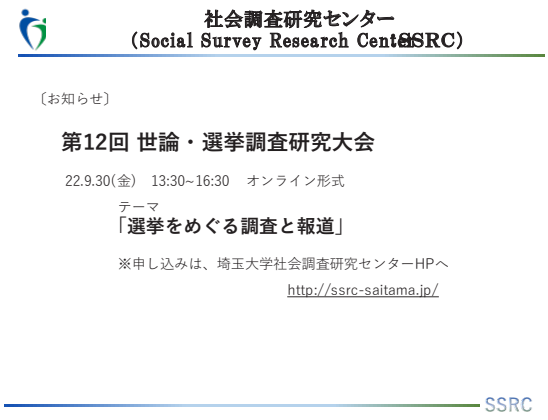
| | 18.19～39 | 40～59 | 60～ |
|---|---|---|---|
| 自民 | 15 | 40 | 45 |
| 立民 | 10 | 32 | 58 |
| 維新 | 12 | 38 | 50 |
| 共産 | 11 | 30 | 59 |
| 参政 | 21 | 46 | 33 |
| NHK | 25 | 48 | 27 |

（%）




ＳＮＳを使った選挙運動がどれだけ効果を持ったかというのは私の守備範囲ではないので、世論調査データの限りで安易な外挿をしてはいけないので、どんなデータが示せるかなと思ったのですが。例えば、参政党とかNHK党に投票した人の年齢別比率を見ると、確かに若い人のほうが比率が高いのですけれども、あとはほとんどフラットで、年配の方の支持も結構得ているなというとこ

ろがあったので、あえて年齢別支持率ではなくて、それぞれの政党の投票者の年齢構成比、言ってみれば、支持者の平均年齢みたいなものを出したのが、この図・表です。年配の方に偏っている政党もありますけれども、参政党とかＮＨＫ党に投票した人の中では、60以上の方が占める比率が3割ぐらいいらっしゃるのですよね。意外と満遍なく支持を得ているのだなと思います。確かにお若い人の比率は、ほかの政党に比べたら高いですけれども。褒めるわけではないのですけれども、ＮＨＫ党の支持者の年齢構成を見ていると、すごくバランスが取れているというのですかね、統計で言う正規分布しているのですよね。ここに支持政党なしを重ねると、支持政党なし層の年齢構成比と重なるのはＮＨＫ党です。ここのところが1つの特徴なので、あえて言えば、参政党とかＮＨＫ党というのは、このデータを見る限りで言えば、中高年層にも認知されたのだなというか、少なくとも違和感というのは解消されたというか、持たれないで受け止められているのだなと見て取れると思います。あとは皆さんがどういうふうにこのデータを解釈されるかですけれども、そんな傾向が分かりました。これが追加のデータです。




何かご質問があればということなのですけれども、最後にちょっと宣伝になってしまいますが、これは埼玉大学の社会調査研究センターが毎年開催している世論・選挙調査研究大会を9月30日にオンライン形式で行いますので、今回の情勢調査等々のお話をしていただこうと。もう1つは、情勢調査や出口調査の話だけではなくて、選挙をめぐるこういう調査と、それに基づく報道という形にちょっと広げてお話をしていこうかと。事例報告だけではなくて。そんなことを今考えております。

頂いている時間が1時間ということなので、この辺で私が一方的にお話しすることはやめにして、皆さんからいろいろご叱責を頂ければと思います。取りあえずご清聴ありがとうございました。以上です。（拍手）

○川戸　松本さん、どうもありがとうございました。

（以下、質疑応答は省略）